中国人編入留学生のライフストーリー研究（2）
—進路決定要因に着目して—

久野　弓枝

＜要旨＞

中国人編入留学生の進路決定に至るまでのライフストーリーから、大学在学中の様々な経験が進路を選択する基準となっていることが分かった。また、就職活動をしながら将来像を形成していくことも明らかになった。さらに、留学生の進路選択をサポートしていくために、キャリア教育の専門家と国際交流センターの職員との連携の可能性を提案した。

〈キーワード〉

ライフストーリー、中国人編入留学生、進路選択、将来像の形成、コミュニティ

１．はじめに

2007 年度から経済産業省と文部科学省は「アジア資金構想」を実施してきた。この構想では、留学生・企業・大学が Win－Win の構築を目指し、日本語・日本ビジネス教育・就職活動支援までの人材育成を一貫して行ってきたという。これに伴って、日本語教育の世界でもビジネス日本語教育に関する研究が盛んに行われるようになってきた。しかし、国の構想や日本語学習に特化した実践が、進路選択や将来像の形成を左右しているわけではないことを我々は実践を通して知っている。さらに、日本企業に就職するということは、一つの選択肢でしかないにもかかわらず、留学生の唯一の目標のように語られる危険性も生み出しかねない。このような懸念から、筆者は元中国人編入留学生の日本留学の動機や進路決定までのプロセスを中心にライフストーリー・インタビューを行ってきた。その過程の中で分かったことを紹介したい。第１に、留学を「新たな生活の始まり」と考え、留学を通して自己の成長や多様な可能性を自覚し

ている。また、進路を決定する際にはいくつもの自己の中で調整を付けながら将来の意思決定をしている（中山・佐藤、2014）。さらに、留学中の問題を解決するためには、「重要な他者の存在」、「居場所」などが重要となる場合があることが分かった（久野、2015）。

本研究では１年次から入学している中国人留学生に比べて研究が少ない中国人編入留学生（仮名：タンさん）のライフストーリーに着目し、将来像の形成、進路選択のために何が要因となりうるのかを分析し、日本語教師としてどのような支援ができるのかを考察したい。

2. 先行研究

2008 年に政府より「留学生 30 万人計画」が提出され、2020 年を目途に留学生受入れ 30 万人を目指すと言う。「留学生 30 万人計画」では、留学生の受け入れ拡充だけではなく、就職など卒業・修了後の進路に至るまで、関係省庁・機関等が連携して計画を推進するとしている。このような政策の転換から 2007 年に経済産業省と文部科学省の共同事業として立ち上げられた「アジア人材資金構想」プログラムはビジネス日本語研究に決定的な影響を与え、2000 年代後半以降、ビジネス日本語をテーマとした研究が急増している（三代、2013）。ビジネス日本語研究ではビジネス日本語のシラバス構築のための調査研究（堀井 2012、2013）やビジネス日本語講座修了生に対する追跡調査（深川他、2014）などがある。さらに、学部留学生に対する就職準備教育としてのビジネス日本語教育の必要性を指摘し実践報告がなされている（釜淵 2015、三宅 2015）。このようにビジネス日本語教育における実践、シラバスが検討される中で三代（2013）は就職支援が大きな目的となり「日本文化」の理解が本質主義的な文化観に基づく傾向があるとし、文化の本質主義に抵抗する言説をいかに立ち上げるかが重要だとしている。

一方、元留学生の将来像を捉えるためのライフストーリー研究も行われている。冒頭でも述べたが、一例を示すと、進路選択の際にいくつもの自己の中で調整を行う姿を描いた中山・佐藤（2014）の研究がある。また、三代（2014）

では元留学生のライフストーリーから、「グローバル人材になる」という意味を分析し、3 つの結論を出している。第１に「グローバル人材」というアイデンティティを本質化しない。第２に能力よりも場の意味から就職支援環境を考える。第３に多様性を共有する。これらの研究は元留学生のアイデンティティ交渉の多様性を知るうえで重要な研究であり、文化を本質主義化しない就職支援環境の多様性を考える機会を与えてくれる。しかし、今まで行われてきた研究は留学生がどのようなプロセスを経て進路を決定しているのか、進路を決定する際に重要な要因とは何か、といった議論が十分とは言えず就職支援内容に結びついているとはいい難い。そこで本稿では、中国人編入留学生のライフストーリーから進路決定プロセスと要因を詳細に検討し、筆者が実施した就職支援の一例を紹介したい。

3. 調査概要

タンさんに研究の内容を説明し、調査の承諾を得た後、筆者の研究室で半構造化インタビューを 2 度実施した。インタビューは IC レコーダーに録音し、その内容はすべて書き起こした。そして、訂正箇所がないか、タンさんに確認した。インタビューはすべて日本語で行った。

第１回　2013 年 6 月 13 日　要した時間は約 1 時間半

第２回　2014 年 3 月 26 日　要した時間は約 3 時間

3－1. 調査協力者について

タンさんは中国出身の 22 歳の女性である。海に近い田舎町で生まれ、両親が仕事のために「出稼ぎの都市」と言われている A 市に移ったため、小学校 5 年生までは祖母に育てられた。それ以降、両親と暮らすために小学校 6 年生の時には、彼女も A 市に引っ越した。中学校 2 年生までは成績がよく進学校を目指していたが、3 年生になり成績が落ち、希望の高等学校に進学できなかった。そのため、高等学校時代は「地獄だった」と言う。大学は両親が希望した A 市にある一流総合大学の日本語学科に入学した。大学 1 年生の終わりには日本語

で基本的な会話ができるようになり、2 年生になり文法が大好きになった。「日本語を勉強しているから、日本に行ったほうがいい」と思うようにもなった。「親から離れたい、自立したい」という気持ちが強く「日本にずっと残りたかった」ので、1 年間の交換留学ではなく「2 年間の契約がある大学」を選んだ。日本の大学の 3 年次に編入してからは、ゼミを選び専門科目を学ばなければならなかったため、大変であった。日本語のレベルは日本語能力検定試験 N2 と N1 の間のレベルであったが、彼女が大変だと感じたのはゼミという制度であった。中国ではゼミがなく、今まで全く学んだことがない専門のゼミを選んだため、困難は増した。ゼミ選択の失敗や人間関係が問題で一時は「自分が生きている意味が分からなくなった」こともあった。しかし、教会の日曜礼拝の参加、[注)1] 国際交流クラブのリーダーとなることによって、「自分の居場所を見つけ出した」。（詳細は久野（2015）を参照されたい。）

3－2. 分析方法

佐藤（2013）を参考に実施した。文字化した資料を何度も読み、会話のまとまりごとに見出しをつけ、見出しと要約カードを時間軸に並べ替えた。そして、どのような要因が現在の結果を生み出しているのか、幾度も検討し、ストーリーを作成した。作成したストーリーはタンさんに確認してもらい、修正を受けた。

4. タンさんの進路決定に関するストーリー

久野（2015）ではタンさんの幼少期から留学後、問題に直面し、それを乗り越えたと思われる 4 年生の春学期初めごろまでのエピソードを分析したが、本稿では進路選択に関わる彼女のストーリーを紹介する。そして、ストーリーから進路選択、将来像形成に関わる要因について分析する。

タンさんについての理解を深め、彼女の変容を忠実に表現するため彼女が発した言葉を最大限使用し、ストーリーを再構成する。ストーリーの中で「　」

注[1] 家族はキリスト教の信者で幼少期から教会に行く習慣があった。

で示している部分は、彼女の発言をそのまま引用したものである。

タンさんは大学院に進学することを希望していた。なぜなら、社会人になるのは学生生活と違い厳しいと感じたからだ。また、将来は新聞社で社説を書きたいという気持ちがあったので国際関係を大学院で勉強したいと思った。しかし、経済的な問題もあり、両親の賛成は得られなかった。

タン：大学院のことを親に相談したらあまり賛成してくれなかったです。うちの家族、兄弟が 3 人います。もし自分が大学院に行こうとしたら、学費の面でちょっと負担かなと。

タンさんは大学院進学を諦めきれず、ゼミのアドバイザーにも自分の研究テーマについて相談したが、テーマの変更を勧められた。

タン：将来、新聞の社説を書きたいと相談したら、先生に社説だけでは食べていけないですよって。留学生だから語学の面が有利だから、通訳とか考えたらいいんじゃないかって言われて。

ゼミのアドバイザーと話し合った結果、彼女は「自立」、「日本に残りたい」という気持ちが非常に強かったため、大学院進学を諦め日本で就職する方向で動くことにした。親から自立したいという気持ちが強く「中国へ帰国する意思はずっとなかった」。

久野：大学院には未練はなかったんですか。
タン：ゼミの先生と話して自分の先がはっきりしたような感じがしました。お金のほうも心配しなくてもいいですし。それで、一応、就職のほうを選びました。自立したいし、絶対、日本に残りたかったですし。

日本で就職をすることを決断したが、4 年生の 7 月になっても就職活動に取り組むことができなかった。

タン：就職したいという気持ちになったんですけど、あんまり動けなかったんですね。
久野：動けなかった？
タン：自分は他の人よりは経験とか積んでいないので、分からないし、すごく怖かったです。
日本にどうしても残りたいという気持ちが強いのに。

就職活動に積極的に取り組むことができないまま、夏休みを迎えた。就職が決まらないという不安はあったが、以前から決めていたインターンシップに参加することにした。タンさんは「じっとしていることが苦手で忙しいのが好き」なので、何かしないではいられなかった。インターンシップ先はリゾートホテルで、仕事内容は宴会場の準備や掃除、ドリンクバーの係りなど多岐に渡っており、１日、長いときは 11 時間ぐらい仕事をしたこともあった。仕事は大変だったが、彼女はインターンシップを通じて、ワーキング・ホリデーで来ていた台湾と香港の女性と友人になり、交流を楽しんだ。彼女にとって大学生活では味わえない経験をすることができた。

久野：インターンシップ、きつかったみたいだけど、どうして耐えられたの？
タン：いい友達がいましたんで。ワーキング・ホリデーで来ている香港と台湾の人で。仕事が終わったら、一緒に戻ってきて、ラウンジに集まって、それが毎日の定番。休みにはレンタカーを借りて旅行して今までで一番楽しかったときかもしれません。

インターンシップでは「我慢すること」、「能力より態度が重要」、「どんなに仕事が厳しくても、支えあう人がいたらやっていける」と思った。

4 年生の後期から就職活動を本格的にスタートさせた。他の人と比べて「遅れていると感じた」。しかし、卒論も完成させなければならないので、「なんとか頑張って早く就職を決めたい」と思った。商工会議所の合同説明会や大学のキャリア・サポートセンターに通う日が続いた。タンさんは日本語能力には問題を感じなかったが、日本の就職活動のしきたりや面接について知識を持ち合わせていなかった。

タン：履歴書を書いたりして、何か一歩、一歩進んでいました。面接の時のマナーや答え方がよく分からないので、練習しました。日本語が分からないのではなく、どのように答えたらいいのか、が分からないんですよ。

なかなか内定をもらえずにいたが、諦めることなく就職活動を「一歩一歩進めた」。できれば旅行業界で働きたいと思った。それは国際交流サークルでの活動に参加したのがきっかけであった。

タン：国際交流サークルで日本人学生と留学生の交流で BBQ を企画して、自分は色々な企画をしたり、計画を立てるのが好きだと分かって。自分も旅行できるし、何か楽しいじゃないですか。

しかし、4 年生の秋学期になると旅行業界の求人は少なく、求人があっても中小企業だった。彼女は旅行業界と並行して求人数が一番多いホテル業界も視野に入れて就職活動を続けた。インターンシップでの経験もホテル業界の関心とつながっている。

タン：インターンシップでの仕事はきつかったけど、一緒に楽しかったんで、ホテル業界に行ったら、そういう感じかなと。最初、ホテルに勤めようと思わなかったんですけど、何かこの経験を活かさないのはもったいないと思いまして。

中小企業の旅行会社と大手のホテルから内定を得ることができた。就職活動を行っているうちに「自然に笑顔で話すことができる」ようになり、自信を得た。自信を得たことによりタンさんの視野はどんどん広がっていった。旅行業、ホテル業以外の業界にも関心を持ち面接を受けた。彼女が関心を持ったのは人材派遣会社である。人材派遣会社に関心をもった理由と辞退した理由を次のように語っている。

タン：途中で人材派遣会社にも行きました。自分が苦しかったことがあったから、苦しんでいる人を助けたい。周りで就職が決まっていない人が多くて、自分は留学生のために何ができるのかなって。でも、契約社員で半年単位でビザの更新が必要で。やっぱり正社員じゃなければいけないという気持ちが結構強かったので。

タンさんは最終的には４社から内定を得ることができた。次に、彼女が内定先の中から１社を選択するプロセスを見ていく。タンさんは最も関心を持っていた旅行会社を辞退した理由を次のように語った。

久野：最終的には４社から内定をもらったんだよね。
タン：はい。A ホテル、B ホテル、C ホテルと D 旅行会社。
久野：どういうふうに決めていったの？
タン：自分もすごく悩みましたけど、旅行会社に行きたかったんですが、選ばなった理由は担当エリアが中国で接待とか中国語を使うのが一番多いですね。それで、日本語はまた下手になるんじゃないかと思って。会社も大規模じゃないので、転職するときに大手のほうがもっとチャンスがあるかなっていう感じもありました。

旅行会社を辞退し３つのホテルから一つのホテルを選ばなければならなかった。タンさんが選んだのは女性のリーダーが多い大手のホテルであった。女性

がリーダーとして活躍している姿を見て自分の将来像をイメージすることができた。また、大手のホテルに就職することで、転職にも有利だと思った。

久野：3つのホテルの中でAホテルを選んだのは？

タン：Bホテルは30時間以内の残業は無料でしなければなりません。寮にも行ったんですけど、インターンシップをしたホテルとは違って、何か（周りの人と）仲良くなる可能性が高くないかなって思って。仕事するなら、今まで経験したことがないことをしたいですし。

久野：Cホテルは？

タン：偉い人は全部男性で、女性のリーダーはあまりいなかったので。

久野：最終的にAホテルにしたのは？

タン：C ホテルと全然違って、女性のリーダーが多くて。何か先が見えたかなって。大手企業だし、キャリアアップとかもできるかなって。転職のときも有利かなって。

5. 考察

タンさんの進路決定までのストーリーを見てきた。大学院か就職かを決定する際にはアドバイザーからの助言と家庭の経済状況を考え、大学院進学を諦めた。彼女の語りから大学院で研究するテーマが明確にあったわけではなく、社会に出る怖さから就職に目を向けられずにいたことが分かった。しかし、就職を選択したにもかかわらず、「動けなかった」とタンさんは語っている。日本に絶対残りたいという気持ち（就職活動を行う動機）は高いはずなのになぜか。彼女は他の学生より就職活動が遅れたため、就職活動を行っているコミュニティに入ることができず、情報が入らないため不安が増幅し時間だけが過ぎていったのだ。このことから就職活動を行う留学生には、未知への恐怖心を軽減するサポートや情報提供の工夫が必要なことが分かる。この悪循環を断ち切ったのがリゾートホテルでのインターンシップであった。インターンシップを通して「我慢すること」、「仕事をする態度」、「支え合う大切さ」を知った。タンさ

んはインターンシップで台湾と香港の知人に支えられながら、彼女が就職する上で欠かせない要素を明確にしていった。

乾（2010）の言葉を借りていえば、インターンシップはタンさんにとって同質なコミュニティの中では得られない異質な情報をもたらす重要な役割を果たしていたと言える。

インターンシップを終えた彼女は大学のキャリア・サポートセンターを利用し、本格的に就職活動を開始した。キャリア・サポートセンターには「色々な先生（職員）がいて良かった」と彼女が語っていることから、キャリア・サポートセンターには多様な人材が必要なことが分かる。

乾（2010）は多くの若者はその時々の状況や側面に応じ、複数のコミュニティに支えられつつ、アィデンティティを形成・維持しており、アイデンティティを支えるコミュニティの存在が重要だと述べている。彼女の職業選択も彼女が経験してきたこと（国際交流活動、インターンシップ、ゼミでの経験）などに基づいており、アイデンティティの揺らぎや葛藤があっても、彼女を支えるコミュニティによって、彼女は困難を乗り越えられた。

タンさんが就職活動を進めていくうちに、職業選択を人材派遣会社にまで広げられたのは、就職活動を通して、的確な知識と自信を得て、自己の役割について考えるようになったからであろう。乾（2010）の言葉を借りていえば、目標に向かう自身のアイデンティティが再組織され強化されている。そして、最終的には将来のキャリアアップを見据えて自分の将来像を描ける企業を選択したと言えよう。

6. おわりに

進路を決定する要因は重層的で複雑だ。タンさんに関していえば、「家族の経済状況」、「高い日本語能力」、「求人状況」、「企業の将来性」、「企業の受け入れ体制」（ビザ・保証人の問題）、「経験によって培った知識や能力」、「彼女を支えるコミュニティ」、「日本に残りたいという強い動機」、「オートノミーの所持」などが挙げられる。

進路選択の要因が非常に重層的で複雑なことが分かったが、それでは、筆者は日本語教師として何ができるのであろうか。詳細は別の機会に述べることにするが、キャリア・サポートセンター、国際交流センターとの連携が挙げられる。今まで行った一例を紹介する。第１に先輩留学生による母国語による座談会がある。日本語で行うのではなく母国語で行うことにより、進路選択に悩んでいる留学生たちは、自由闊達に話すことができた。第２に日本語教師だけではなくキャリア教育の専門家や国際交流センターの職員との座談会がある。「自己紹介」、「出身地の紹介」など留学生にとって身近なテーマから「自己分析」、「関心がある仕事・研究」など留学生が自分自身について、語る機会を設けた。座談会の大枠は教員側で準備したが、留学生に座談会で「何がしたいか」、「どのようなことを聞いてもらいたいか」を聞き、毎回の内容を決めていった。参加人数は少なかったが、毎回、留学生たちは自分に関心を持って聞いてくれるキャリア教育の専門家や国際交流センターの職員に自己について活き活きと語っていた。それは教室では見られない彼らの姿であった。日本語教師の他にも相談できる人、自分に関心を持ってくれる人がいると感じられたのが良かったのではないかと考える。また、講義や実践練習ではなく座談会という緩やかな形式も留学生にとって安心して話せる環境であったようである。このような活動を通じて、留学生とキャリア・サポートセンターの距離は縮まり、就職活動や大学院の試験などで、疎遠になりかけていた留学生同士も近況を話し励ましあう環境が作り出された。

留学生にとってキャリア・サポートセンターは決して身近な場所とは言えないのが現実である。キャリア・サポートセンターの職員にとっても留学生をどこまでサポートしていいのか、戸惑うことが少なくないという。このような状況を少しでも改善していくことも日本語教師に求められている役割であると考える。

青木（2001）は日本語教育の役割として学習者が自分の人生の質を高めるために必要な自己イメージ、人間関係の在り方、社会のシステムを創り出す力を育てることであると述べている。さらに、日本語教師の役割の一つとして、人

のネットワークづくりの支援を挙げている。教室で就職活動や進学に必要な日本語を学習することは言うまでもなく重要なことではあるが、日本語教師がネットワークを広げることで可能になることも少なくない。今後は今まで行ってきた実践を分析し、キャリア・サポートセンターと国際交流センターの職員との連携でどのような実践が考えられるのか、その可能性について検討する所存である。

〈参考文献〉
青木直子（2001）「第１章　教師の役割」青木直子・尾崎明人・土岐哲編『日本語教育学を学ぶ人のために』182－197
乾彰夫（2010）『＜学校から仕事へ＞の変容と若者たち―個人化・アイデンティティ・コミュニティ』青木書店
釜淵優子（2015）「留学生の就職活動に寄り添うビジネス日本語コース構築の試み」『関西学院大学日本語教育センター紀要』4 号　29－39
久野弓枝（2015）「中国人編入留学生のライフストーリー研究（１）―編入留学後の問題に着目して」『札幌大学総合論叢』第 39 号　63－73
佐藤正則（2013）「留学経験の意味と自己実現についての考察　元留学生のライフストーリーから」『言語文化教育研究　第 3 部ナラティブ』11　308－327
佐藤正則・中山亜紀子（2014）「中国人女子学部留学生の留学動機と将来像」2014CAJLE Conference Proceedings　85－93
深川美帆他（2014）「ビジネス日本語講座修了生追跡調査：金沢大学におけるパイロットケースの実践報告」『金沢大学留学生センター紀要』(17)　57－69
堀井惠子（2012）「留学生の就職支援のためのビジネス日本語教育のシラバス構築のための調査研究 3―タイ・バンコクの日系企業などへのインタビューからの考察―」『武蔵野大学グローバル教育研究センター』創刊号　31－46
堀井惠子（2013）「ビジネス日本語教育におけるシニアサポーターの活動の意義と課題」『武蔵野大学グローバル教育研究センター』第 2 号　77－87
三宅真由美（2015）「学部留学生に対する就職準備教育としてのビジネス日本語教育」『信州大学経済学論集』66 号　11－18
三代純平（2013）「ビジネス日本語教育における『文化』の問題―アジア人財資金構想プログラム以降の先行研究分析―」『徳山大学総合研究所紀要』No. 35 173－188
三代純平（2014）「『グローバル人材』になるということ―元留学生のライフストーリーから」第 34 回アカデミックジャパニーズ研究会発表資料
文部科学省（2008）「『留学生 30 万人計画』の骨子の策定について」(www.mext.go.jp/b_menu/houdou/20/07/08080109.htm)

謝辞
調査協力者のタンさん（仮名）には心から感謝申し上げる。

付記
本稿は、平成 25 年度科学研究費(C)「ライフストーリーを用いた学部留学生の将来像の形成過程に関する研究」(研究課題番号 25370594)の助成を受けて行われたものである。